

研究ノート

百年戦争時代及びその前後の諸王・諸公

Les rois et princes avant, pendant et après la Guerre de Cent Ans

尾崎 昭 美

要 旨

本研究は百年戦争までの英仏両国の関係史から説き起こし、戦争の遠因をここに探りながら、百年戦争の経過を記述したものである。この研究の眼目は、百年戦争を戦った英仏の諸王諸公の関係を俯瞰する両国王の系図を示したことである。

さて、フランス西南部の広大な領地を占めるアキテーヌの公女アリエノールが、ルイ七世と結婚しながら、離婚し、プランタジュネ家のアンリと再婚して、一時はフランス王領となった地域リムーザン、ガスコニュ、ペリゴール、そしてアキテーヌ公領全部を婚資としてイングランドにもたらしたところから、両国の軋轢が始まる。以後、領土問題に、婚姻による血縁関係が事を複雑にし、加えて、ブルゴーニュ派とアルマニャック派の対立と王座を狙う姻戚関係による国内の四分五裂状態が重なり、フランスは存亡の危機に見舞われる。

英仏百年戦争はこのような状態の中で、殆どフランス国内で戦われ、フランスは連戦連敗を喫し、遂にはイングランド王がフランス王を兼任するところまで達する。フランスのこの危機を救ったのがジャンヌ・ダルクである。

本研究のこれらの記述は今後の研究の骨格をなすもので、筆者の定年退職後に追々肉付けして行かんとするものである。

キーワード：百年戦争と諸王

緒言

フランス中世の文学や文化を理解するには、百年戦争について知っておく必要がある。そこで筆者はフランス文学史を講ずるとき、中世の部分の資料として、百年戦争を戦った英仏の諸王諸公の関係を示す系図を作成し、配布している。この時代の英仏両王の関係を同時に示す系図はあまり見かけることがないので、上記系図に手を加え、資料としてここに掲載し、各王の時代を略述して、何かの折に諸賢のお役に立つことがあるかもしれないと冀うものである。なお、文中や註に使われる略号は、使用文献として、末尾に掲載するが、本文の説明的記述は殆ど全て、これらの文献に負い、それは今後予定している本格的研究の骨格をなすことになる。

百年戦争とは、フランスでシャルル四世が死に、カペー朝が断絶して、フィリップ 6 世がヴァロワ朝を開いたとき、イングランドのエドワード三世が王位継承権を主張して、1339 年にフランスに侵攻した時のこの両王の戦いから、1453 年、ヘンリー六世がシャルル七世に降伏したカスティヨンの戦いまでの英仏戦争を謂う。しかしその遠因は、1066 年のオレンジ公ウィリアムによるノルマン・コンクエスト以来、英王が大陸においては、フランス王と主従関係にあり、イングランドにおいては王座にあるという英仏両王の二重構造にある。問題が顕著になったのはプランタジネット家のヘンリー二世が大陸に広大な領土を保有するに至った時で、この時以来、英仏の抗争が続く。使用した参考文献には、N に「1154 年から 1258 年までと、1337 年から 1453 年までの二つの百年戦争」⁽¹⁾の記述があり、前者を第一次百年戦争、後者を第二次百年戦争と呼称している。本研究では第二次以前を百年戦争前史として、ここから始めることにする。上記の系図は、ヘンリー二世とルイ七世から始まり、百年戦争が終結した時代のヘンリー六世とシャルル七世を経て、ルネッサンス時代のエリザベス一世とアンリ四世に至る諸王・諸公の関係を繋いだもので、G, Y 新, Y 旧, B などに掲載の系図を合成し、末尾記載の諸文献を参照しながら作成したものである。

百年戦争前史

1137 年、カペー朝第五代目のフランス国王ルイ六世は王太子ルイとアキテーヌ公女アリエノールを結婚させた。le Jeune (ル・ジュンヌ若年王) と呼ばれるルイ七世は、父の死により、同年 17 歳で王位を継ぐ。彼は王妃が持参金として彼にもたらしたピレネーに及ぶ全西南地方を得て、強大な領地を擁することになる。しかし南国的で、文芸を愛するアリエノールは「信心家の」⁽²⁾この青年を好きにならず、逆に「牛のような頸をし、短く

刈った栗色の髪をした頑丈な若者」⁽³⁾のアンジュー伯アンリ・ブランタジュネに恋する。彼女はアンリがルイ六世に臣事の礼を執りに赴いた際に彼を見初めたのだ⁽⁴⁾。そこで彼女は1152年に、ルイ七世と離婚し、その年の内に、希望通りアンリと結婚し、一時はフランス王領となった地域リムーザン、ガスコーニュ、ペリゴール、そしてアキテーヌ公領全部はイングランドの所領となる。アンリは既に母のマチルドからノルマンディー公領を相続、父からはメーヌとアンジュー伯領を相続し、1154年、ヘンリー二世としてイングランド王になった時には、妻が彼にもたらした広大な地域を加えて、彼のアングロ=アンジュー王国はピレネー山脈からスコットランドに広がる地域を領してフランスを威圧する。こうしてアリエノールを挟んで、この二人の王の子孫が対峙し合うことになる。といってもその戦争は間歇的であり、ルイ六世と七世が統治した時代の両国の関係は比較的に安定していた。この間、王たちはパリを王国の首都とし、高等法院の前身となる統治機関などを常設し、権力の集中化を謀った。親子二代に渡って仕えた名宰相シュジェを得て、二人の王は国内の城主たちの権力制圧に乗り出し、成功する。

一方、ヘンリー二世は五人の男子を得たが、長子は早く死に、長男となったヘンリーに、彼はその妃としてルイ七世の娘マルグリットを迎えさせる。ルイ七世には長く、男子が生まれなかったために、ヘンリー二世はゆくゆくは二人の間に生まれるであろう王子をフランスとイギリスを統べる王位に着かせるという望みを持った。ところが、ルイ七世が四十五歳の1165年、三番目の王妃が男児を生み、しかも息子のヘンリーが1183年、二十八歳で死んだため、ヘンリー二世の希望は断たれる。加えて、三年後には三男のジェフェリーも死に、残ったリチャードとジョンはフランス側の策謀に操られて兄弟相争う。こうしたなかで、ヘンリー二世は失意の内に死に、リチャードが後を継ぐ。

フランスでは1180年にルイ七世が死に、尊厳王（Auguste オーギュスト）と呼ばれることになるフィリップが十五歳で後を継ぐ。彼はリチャード一世やその弟ジョン以外に、位階の上位を要求するドイツ皇帝という対抗相手もいた。彼は、the Lion Hearted（獅心王）と呼ばれたリチャード一世と最初は、仲が良かった。彼らは1190年の第三回十字軍に同行し、シリアのサン・ジャン・ダルク要塞の攻撃に協力して戦い、これを占領する。しかしフランドル伯が対イスラム戦で戦死したとの報に接し、フィリップ二世は急遽、帰国する。1181年の英仏和約で危機感をもったシャンパーニュ公とフランドル伯が同盟を結び、この地域に緊張が生じていたからだ。彼はリチャードの不在をいいことに弟のジョンと協定を結び、ノルマンディーを獲得する。リチャードは帰国すると弟と和解し、フランスとの戦争を開始する。リチャードはその名のとおり、勇猛な騎士で、1194年のフレトヴァルの戦いで大勝し、引き続き1197、98年の戦いでも連勝する。しかし彼はアキテーヌのシャリュ城攻略の最中、矢傷がもとで陣没する。

弟のジョンが即位したが、彼は the Lackland (欠地王) と呼ばれることになる。というのも、彼はポワトゥー領主ユーグ・ド・リュシアン（注1）の許婚者イザベルを奪い、結婚する。ユーグは1202年、国王の法廷に提訴して、この問題が裁かれることになったが、ジョン王が出廷を拒否したため、法廷は大陸にある彼の財産全ての没収をフランス王に許した。フィリップ二世は国内のイングランド領を次々に攻略し、ジョンはノルマンディー、メーヌ、アンジュー、トゥーレーヌ、ポワトゥーを失うことになった。また1208年、トゥールーズ伯領内の異端派に対するアルビジヨワ十字軍が始まり、フィリップ二世はシモン・ド・モンフォールの働きによって、トゥールーズ伯領を始めとする南西地方をフランス王領に加えることができた。1214年、フィリップ二世は英王ジョン、皇帝オットー四世、フランドル伯の連合軍とフランドル南部のブーヴィーヌで戦い、これを破る。彼はシノンの和約でロワール河以北のイングランド領を獲得する。フィリップ二世は優れた政治家であり、ルイ六世、七世が伸長させた王権集中を更に強化した。また十字軍守護のために創設された聖堂（テンプル）騎士団に王室財務官の役割を果たさせ、パリを整備し、ルーヴル城を築き、警察を創設した。

一方、ジョン王はと言えば、ブーヴィーヌの敗戦で、財政は底をついていた。しかも教皇インノケンティウス二世によってカンタベリー大司教に派遣されたラングトンの就任を拒否し、就中、その所領を没収したために、教皇庁から破門された。ジョンは屈服したが、そのラングストンが1215年、貴族や一般民衆の先頭に立ち、ジョン王に忠誠破棄の通告（ディグティオ）を突き付け、《大憲章》に署名するよう要請する。王はやむを得ず署名するが、実施する積もりはないので、貴族たちはフィリップに介入を要請し、フィリップは息子のルイを派遣するが、ジョン王は1216年「出来たての林檎酒の飲み過ぎや、桃の食べ過ぎで胃腸を痛め」⁽⁵⁾この世を去ったという。

貴族たちは九歳になる息子をヘンリー三世として擁立し、ルイに反旗を翻したのでルイはイングランドを撤退した。貴族たちは王が幼少の間に大憲章に手を加え国王評議会の権限を強化した。ヘンリー三世は、1227年から親政を開始するが、彼と向かい合ったフランス王も十二歳の少年王ルイ九世であった。それより先、ブーヴィーヌの戦いから九年後の1223年にフィリップ二世は死に、ルイ八世が即位した。彼は le Lion (ル・リオン獅子王) と呼ばれ、ヘンリー三世に宣戦布告して、ポワトゥーなどを占領、アルビのトゥールーズ伯を制圧するが、わずか三年後の1226年に病没する。そして後に、Saint (聖王) と呼ばれることになるルイ九世が即位し、ヘンリー三世対ルイ九世の時代となる。ルイ九世が即位したとき、この少年王の周囲では王族、大諸侯らがヘンリー三世と結んで反王権同盟を結成した。摂政となった王母ブランシュはその血縁者や教皇庁との関係を維持しながら、側近の協力のもとに、反乱に抗する。そして1229年にはトゥールーズ伯がローヌ河以西

の領地を国王に譲渡し、この年、1208 年以来続いた、アルピジョワ十字軍を収束させる。1234 年、王は親政を開始し、1236 年にナヴァール王が降伏し、反乱は鎮定される。1242 年、トゥールーズで再び、ヘンリー三世に支持された反乱軍が仏王に宣戦布告するが、ルイ九世はこれを破り、ボルドーの和約で五年間の休戦が成立する。その後ルイ九世は十字軍に赴き、帰国すると再びヘンリーと同盟したフランスの貴族たちを撃破し、パリ条約によって、ガスコーニュとアキテーヌをイングランドに返還する。彼はそれと引き換えにイングランド王のフランス王に対する恭順と、大陸における他の要求の撤回を約束させたのである。「ヴァンセンヌの柏の木」とはルイ九世がこの木の下で重臣たちに取り巻かれて裁判を行ったことで、彼は常設的な法廷を専門化して、高等法院を創設し、財政部門では会計検査院の前身となる機関を設立した。1270 年、再び十字軍に出発し（これは第七回であり、これが十字軍最後の遠征になる）、遠征先のチュニスでペストのために病没する。彼は死後、ローマ教皇によって聖人に列せられる。

一方、ヘンリー三世は大陸でアキテーヌの地を確保できたものの、ローマ教皇庁と神聖ローマ帝国の確執に巻き込まれ、その政策は聖職者と貴族の合同した反抗を招くこととなる。レスター伯シモン・ド・モンフォール⁽⁶⁾によって指導される内乱が七年間、続いたあと、1259 年ヘンリー七世は「オクスフォード条令」を承認し、《議会》において決定された諸条項の遵守を宣誓した。しかし 1262 年、ヘンリーはこの条令を無効とし、レスター伯を追放した。しかし王は逆に反乱軍の捕虜となり、貴族たちの要請に屈した。1266 年、今度は王側が攻撃をしかけ、今回は勝利して、レスター伯は戦死する。しかしヘンリー三世は《大憲章》と「オクスフォード条令」を再確認し、以後、王権は議会に制約されると同時に、時にはこれに守られることになった。

1272 年にヘンリー三世が死に、エドワード一世が後を継いだ。彼はノルマン・コンクエスト以来、使用されたフランス語のかわりに公用語を英語に戻した。国外的にはこの時代、平穏が保たれ、その機会を利用して、彼はスコットランド、アイルランド、ウェールズを支配下におこうとしたが、ウェールズを除いて成功しなかった。ウェールズだけは完全に合併され、この時生まれた皇太子にプリンス・オブ・ウエルズの名を与えた。以後イギリスの皇太子はこの名で呼ばれることになる。1295 年に召集された議会は主要な階級の代表を出席させて開かれ、後の議会の範となるべきものであったので、歴史上、模範議会と称される。

エドワード一世は 1307 年に死に、エドワード二世が後を継いだ。

それより先の 1270 年にルイ九世の後を継いだのはフィリップ三世 le Hardi（ル・アルディ大胆王）だが、彼は教皇の要請を受け入れてアラゴン攻略に向かう途中に陣没する。こうして le Bel（ル・ベル美男王）と渾名されたフィリップ四世が即位する。彼は聖職

者に対する課税に関して教皇庁と対立し、全国三部会をパリで開催して、その支持を背景に1309年、教皇庁をフランスのアヴィニョンに移す。いわゆる「教皇のバビロンの捕囚」であり、1377年の教会大分裂に至るまで、歴代の教皇はフランスの支配下に置かれる。王はまた、聖堂（テンプル）騎士団の財産、所領を王国のものにするために、これを弾圧、廃絶する。1119年、聖地巡礼の保持と聖墓護衛のために設立され、イスラムとの交易などで莫大な財産を蓄え、フランス王国の会計の管理を任されたこの集団はここに消滅する。1314年、騎士団長のモレが焚刑に処せられたとき、彼は「一年後に神の法廷に出頭するよう、王を指定した」と叫び⁽⁷⁾ フィリップ四世は年の内に死ぬ。

le Hutin（ル・ユタン喧嘩王）⁽⁸⁾と渾名されたルイ十世が後を継ぐが在位約一年半で死に、1316年、生まれると同時に即位した息子のジャン一世は五日後に死に、ルイ十世の弟、フィリップ五世 le Long（ル・ロン長身王）が王位を継ぐ。彼の時代、大評議会が創設され、会計検査院が正式に設立されるが、この王も在位五年で世を去る。そしてフィリップ四世の最後の息子、シャルル四世 le Bel（ル・ベル美男王）が即位する。彼はガスコーニュに侵攻して、英領からの没収を宣言するが、1328年に死亡し、1314年からの14年間に立て続けに四人の王が死んでカペー王朝は断絶する。王位はフィリップ四世の弟で、ヴァロワ伯となったシャルルの息子フィリップに継がれた。彼はフィリップ六世として即位し、ここにヴァロワ王朝の時代が始まる

一方、イングランドではエドワード二世の時代、財政は逼迫し、加えて、スコットランドで大敗し、更には1316年、フランスの新王フィリップ五世に対して、英王は臣従の礼を拒否しながらも、王妃で、フィリップ四世の娘であるイザベルと王子をフランスに派遣した。その後、1224年、王と不仲となったイザベルは翌年、王子を伴ってフランスに逃れる。そして、1327年、イザベルは愛人のモーティマーをと共に、軍隊を連れてイングランドに戻り、失政で威信を失った王を捕らえ、その家臣を処刑した。同年召集された議会は、十七歳の王子エドワードをエドワード三世としてイングランド王と認め、イザベルが摂政の位に着いた。廃位されたエドワード二世は暗殺される。イザベルは1329年、シャルル五世が没したとき、エドワード三世にフランス王位の継承権があるにもかかわらず、何ら動きを起こさなかったばかりか、1329年には、エドワード三世を伴ってアミアンに赴き、ガスコーニュのイングランド領有に関して、フランス王への臣従の宣誓を行わせた。心に期するところのあったエドワード三世は翌1330年、成人に達するとともに、行動を起こす。彼はモーティマーを捕らえて、処刑し、母から摂政の職を奪い、彼女をハートフォードの城に幽閉する。実権を握ったエドワード三世は、フィリップ六世に対して、王位継承権を主張し、ここに百年戦争が始まる。

百年戦争

シャルル四世が往き、カペー王朝が断絶したとき、フィリップ四世の血縁者は三人いた。即ち、フィリップ四世の弟シャルルの子、ヴァロワ伯フィリップ、娘イザベルと結婚したエドワード二世の子エドワード三世、孫のジャンヌ二世と結婚したナヴァール王フィリップ・デヴルーの子シャルルであり、この三人が王位継承の権利があることになる。このうちナヴァール王シャルル二世デヴルー（以下シャルル・デヴルーと記述）は、早い段階で歴史の表舞台から消え、百年戦争はエドワード三世とその子ら対フィリップ五世とその子らの戦いとなる。

フィリップ五世が即位した 1328 年、フランドルに農民の反乱が起こり、フランス王はこれを鎮圧する。翌 1329 年、エドワード三世は既に述べたように、一度はフランス王に対して臣従の宣誓をしたが、1337 年、フランス王が彼からガスコーニュ領を没収したとき、彼はフランス王位の継承を要求する。同年、フランドルのгент⁽⁹⁾で再び暴動が起こり、反フランス派が市政を掌握したのを機に、翌 1338 年、エドワード三世はフランドルのアントワープに上陸し、翌 1339 年、カンブレを攻撃し、百年戦争が始まった。гентの指導者アルテフェルデはエドワード三世と同盟し、彼をフランス王と認める。

1340 年 6 月 24 日、スロイス⁽¹⁰⁾の海戦で、イングランドはフランスを破り、制海権を掌握する。同年 9 月 7 日、ブルターニュ公位継承戦争が起こる。英王はジャン・ド・モンフォールを、フランス王はシャルル・ド・ヴァロワを支持する。1344 年、ブルターニュ公位継承戦争休戦。1346 年 8 月 21 日、クレシーの戦いで、フランス騎士軍が英軍に大敗を喫する。翌 1347 年、フィリップ六世はカール神聖ローマ帝国皇帝と同盟する。同年 8 月 4 日、エドワード三世がカレーを攻撃、包囲 11 カ月の末、カレーは降伏した。そのとき、6 名の市民代表が、首に縄を掛け、市の鍵を持って王の前に出頭した。王妃がその姿に心を動かされ、王に懇願して、これを解放した故事を年代記作者フロワッサールが書き、20 世紀になってロダンが作品「カレーの市民」でこのエピソードを形象化した。

1349 年、フランス王はドーフィネ地方を購入し、これをシャルル・ド・ヴァロワ（後のシャルル五世）の王太子領とした。以後、イギリスの皇太子が、プリンス・オブ・ウェルズと呼ばれるように、フランスの王太子はドーファン（イルカ）と呼ばれることになる。ちなみに時代が下るが、王太子シャルルが母親イザボアの「庶子」発言に自信を失いかけていたとき、ジャンヌ・ダルクが《gentil Dauphin（優しき王太子さま）》と呼び、その自信を回復させた。この前後、即ち 1348 年には全国に黒死病（ペスト）が蔓延し、1351 年には国内が大飢饉に見舞われる。

このようななかで 1350 年、フィリップ六世が死に、ジャン二世が後を継ぐ。

1354年、シャルル・デヴルーがエドワード三世と同盟を結び、翌1355年9月、エドワードの息子黒太子エドワードがボルドーに上陸する。翌10月、エドワード三世はカレーに上陸し、黒太子はフランス軍を挟撃せんとして、北上を開始する。翌1356年4月5日、ジャン二世はシャルル・デヴルーを逮捕し、黒太子軍をボワチエに迎え撃つ。しかしジャン二世はここで捕虜になり、王太子シャルルが摂政となる。1357年、摂政シャルルがパリで全国三部会を開くと、三部会はシャルルに迫って、大勅令を發布させる。これは三部会の定期的開催とその同意なしに課税、軍事召集、休戦を行わぬことなどを定めたものだったが、シャルルはボルドーで英仏休戦協定を結び、そのあとこの勅令の尊重を拒否したため、翌1358年2月22日、エティエンヌ・マルセル指揮のもとにパリの民衆が蜂起する。シャルルはパリを脱出するが、民衆が赤と青の垂れ頭巾を着用して王宮に侵入したとき、自分のそれを王太子に被らせて、脱出を助けたのがマルセルその人だったと言う。⁽¹¹⁾このときには釈放されていたシャルル・デヴルーは王位を狙い、マルセルと連携する。彼は既述のようにイングランドとも同盟している。マルセルの乱は、5月28日に起きたボーヴェ地方の農民一揆（ジャックリー）とも呼応したが、シャルル・デヴルーがこの一揆を弾圧し、就中、英王との同盟を民衆が知って、民心は離反し、マルセルは7月31日に暗殺され、王太子シャルルはパリに帰還する。

1359年、エドワード三世はシャンパーニュ、ブルゴーニュに侵攻し、翌1360年、プレティニの和約が結ばれる。これにより、フランスはボワトウー、アキテーヌ全域をイングランドに割譲し、エドワード三世はフランス王位の要求を放棄する。一方、囚われの身のジャン二世は身替わりの貴族をロンドンにおいて、身代金の工面のために帰国する。しかし金策は成らず、身替わりの貴族が逃亡したため捕虜の務めを果たすべくロンドンに戻り、1364年4月8日に客死する。

こうして、le Bon（ル・ボン善良王、お人好し）と呼ばれたジャン二世に替わってシャルル五世 le Sage（ル・サージュ賢明王）が王位に着く。彼は同年、旗下の将軍デュ・ゲ克蘭をしてシャルル・デヴルーを破らせ、これと和平する。le Mauvais（ル・モーヴェ悪人王）と渾名されたナヴァール王シャルル二世デヴルーは以後、政争から身を引く。⁽¹²⁾次にシャルル五世はブルターニュ公位継承問題の解決を試みる。1364年、敵方ジャン・ド・モンフォールの捕虜となったデュ・ゲ克蘭を、彼は身代金を支払って、釈放させた上で、ジャン・ド・モンフォールをブルターニュ公と認めることで、この戦争を収拾させる。デュ・ゲ克蘭は引き続き、1367年、カスティリヤの戦いで黒太子に破れて敗走するが、シャルル五世は彼を大元帥に抜擢する。以後、デュ・ゲ克蘭は1369年、英王が支持するカスティリヤのペドロ一世残虐王と交戦し、3年後の1372年、カスティリヤのエンリケと組んで、モンティエリの戦いに臨み、敵王を敗死させる。この1369年に、ブ

ブルゴーニュ公フィリップ二世 le Hardi (ル・アルディ大胆公)がフランドル伯の娘マルグリットと結婚し、これによってフランスの北東部と中部が繋がり、フランス王家にとって脅威となる。しかし1372年、中部フランス大西洋岸のラ・ロシェル沖でフランスとカスティリヤの連合艦隊がイングランドの艦隊を破る。翌1373年、ランカスター公ジョン(ヘンリー七世の父)がカレーに上陸し、ボルドーに向かうが、アキテーヌでは黒太子の悪政に対して反乱が起き、デュ・ゲ克蘭が反乱軍の救援に向かう。彼は持久戦に持ち込み、フィリップ二世の作戦に倣って殆ど戦わずして勝利を収め、1375年、ブリュージュの和約が成ったときには、カレー、パイヨンヌ、ボルドーを除いたフランスの大部分の地をイギリス人の手から解放していた。

1376年、イングランドでは王位継承権者の黒太子エドワードが死に、続いて翌1377年、エドワード三世も死去した。黒太子の子が即位し、リチャード二世を名乗ったが、彼は十歳にしかいなかった。翌1378年、イングランドとドイツがローマに新教皇を擁立し、アヴィニオンと二人の教皇が並立する教会大分裂が起こり(1417年まで)、双方が正統性を主張して、教会の権威が揺らいだ。

フランスでは1380年夏にデュ・ゲ克蘭が死に、続いて九月にシャルル五世も四十二歳の若さで死ぬ。この時代、1357年の全国三部会では集権的徴税組織(エレクション)が具体化され、絶対王政の財政的基盤が確立して、中央集権への道程が確実に進行することとなった。

シャルル五世の後を継いだのはシャルル六世で、この王もまだ十二歳にしか達していなかった。そこでアンジュー公ルイ、ブルゴーニュ公フィリップ、ベリー公爵ジャン、ブルボン公ルイの四公家当主が後見人になった。1388年、シャルル六世は成年に達すると、父の重臣たちを呼び寄せる。翌1389年、イギリスとの三年間の休戦協定が結ばれる。しかし1392年シャルル六世は狂気の発作を起こす。そこでブルゴーニュ公フィリップは先王時代の重臣たちを追放し、実権を掌握する。1396年には英仏間に28年の休戦協定が締結され、その年、王女イザベルと英王リチャード二世が結婚する。そのとき、イザベルはわずか五歳だった。ちなみにイザベルはリチャード二世の死後、フランスに帰され、オルレアン公シャルルと結婚して一年後に世を去る。

イングランドでは少年王リチャードの時代の1381年、黒死病による困窮と重税への怒りが重なり、ジョン・ボールの説教やワット・タイラーの扇動により、民衆の血なまぐさい反乱が起こる。翌1382年、この少年王は非凡な才能を発揮し、反乱を懐柔と弾圧によって鎮定する。1389年、リチャードは権力を掌握し、1396年、イングランドはブルターニュのプレストとシェルブールを回復するが、王の浪費癖と新たな課税に貴族の怒りが再発し、社会的な動揺が起こる。リチャード二世は敵対的貴族らを処刑し、1398年には後見人の

ランカスター公ヘンリーを追放する。しかし 1399 年、王のアイルランド遠征中にヘンリーは反リチャード派の貴族に迎えられて帰国する。ヘンリーは遠征から戻ったりチャード二世を捕らえて、王権を譲位させ、議会でヘンリー四世として国王を宣言し、即位を認められる。ランカスター朝の始まりである。なお、リチャードは一年後に牢獄で餓死しているのが発見されたという。⁽¹³⁾

一方、フランスでは 1405 年にブルゴーニュ家の当主フィリップが死に、息子のジャン Sans Peur (サン・プール無畏公) の代になる。ここで、狂気の王を中にして、彼と王弟オルレアン公ルイの間の権力争いが始まる。この対立は当初、パリの争奪戦として展開されるが、その中で、1407 年、オルレアン公ルイがブルゴーニュ派に暗殺される。オルレアン家の当主となったシャルルは妻の父アルマニャック公ベルナールと組み、この一派はアルマニャック派と呼ばれる。狂気の王を後見すべく、摂政の位にある王太子シャルルは、両派の対立に翻弄される中で、アルマニャック派に支援されることになる。折しも、国内ではラングドック、ノルマンディー、パリなどで、農民や市民の暴動が相継ぎ、社会は騒擾状態に陥る。パリではこの暴動をブルゴーニュ派が支持し、1413 年には王に迫ってカボッシュ勅令⁽¹⁴⁾を發布させ、国王は行政改革を約束する。しかしやがて民心はブルゴーニュ派から離れ、アルマニャック派に移る。

一方イングランドでは 1413 年にヘンリー四世が死に、ヘンリー五世の時代になっている。彼はフランスの国内分裂に乗じて、1396 年の協定を無視し、1415 年 8 月 12 日、ノルマンディーに上陸して、戦闘が再開される。同年 10 月 25 日、イギリス軍はアザンクール (Azincourt 英語読みアジンコート) の戦いで大勝し、オルレアン家の当主シャルルがこの戦いで負傷し、捕虜になる。文学史上でシャルル・ドルレアンと呼ばれる宮廷詩人で、彼は「フランスに噂が流れた / 辺り一帯、私が死んだと。 / 不屈きにも私を憎む輩は / このことで悲しむはずはなかった。 / 優しい私の友たちのように / 心から私を愛したものは / それを聞いて絶望した。 / そこで私はみんなに知らせる。 / はつかねずみは生きている。⁽¹⁵⁾」と歌ってブルゴーニュ派を揶揄した。

イギリス軍は 1418 年、ルーアン攻囲を開始する。そのような中でフランス国内ではブルゴーニュ派が巻き返し、この年、パリを奪還、アルマニャック派の虐殺が始まる。王太子はパリを脱出する。翌 1419 年 9 月 10 日、ブルゴーニュ公ジャンが王太子の友人タヌギ・デュ・シャテルに殺害され⁽¹⁶⁾、フィリップ三世善良公 (le Bon ル・ボンお人好し) が後を継ぐ。彼はヘンリー五世と同盟し、一方王妃イザボーはシャルル六世に迫って、1420 年 5 月 21 日、この三者の間でトロワの和約が締結される。その内容はヘンリー五世と王女カトリーヌ (英名キャサリン) の結婚、ヘンリー五世をフランス王位継承権者とするなどであった。この条約により王太子シャルルは廃位され、放浪の王子となる。打算的な

判断から、この和約は高等法院や三部会を始め、シャルルを支持するロワール河以南の地域を除いて、大方の受け入れるところとなった。ヘンリー五世はパリに入城し、ここに守備軍を置く。ところが二年後の1422年8月に当のヘンリー五世が死に、続いて10月、シャルル六世が死ぬ⁽¹⁷⁾。こうして生後僅か十ヵ月の皇太子ヘンリーが即位してヘンリー六世となり、イングランド及びフランス王国の国王となる。摂政となったヘンリー六世の弟ベッドフォード公ジョンはブルゴーニュ軍の助けを借りて、各地に侵攻し、シャルルをロワール河以南に追い詰める。一方シャルルはアルマニャック派の支持で、シャルル七世として即位を宣言する。シャルルはロワール河の南側を領有し、ブルジュ周辺に宮廷を置いたので、揶揄的に「ブルジュの王」と称された。1424年、彼ははベルヌイユの戦いで破れ、シャンペリーの協定でブルゴーニュ公と和睦する。一方、ベッドフォード公は河の南に進撃するために、1428年10月7日、オルレアン⁽¹⁸⁾の包囲戦を開始する。城主シャルルは捕虜となってイギリスにいる。封建法によって領主が俘虜の身である領地を攻撃することは罪悪であり、それだけにオルレアン軍は、留守を預かったシャルルの従兄弟デュモンの指揮のもとに、一層英雄的に戦った。

分裂し悲惨の状況にあったフランスを救ったのが弱冠十七歳のジャンヌ・ダルクだった。彼女の目標は次の三点、即ち、シャルルを出生の疑惑をから解き放つこと、オルレアンを英軍から解放すること、シャルルをランスの大聖堂で戴冠させることだった。彼女はこのすべてに成功する。1429年4月29日、オルレアンに入り、10日目にこれを解放、7月16日ランス制覇、翌17日にシャルル七世は歴代のフランス王が受ける聖油の祝別を受け、戴冠する。ジャンヌによる《genti Dauphin ジャンティ・ドーファン優しい王太子》の呼称は《gentil roi ジャンティ・ロワ優しい王》に変わる。以後、彼女はイングランド軍に支配された都市を解放して行くが、パリ奪還に失敗し、負傷する。1439年5月23日、ジャンヌはコンピエーニュでブルゴーニュ軍に捕われ、イギリスに売り渡されて、異端審問の末、ルーアンで1431年5月30日、魔女として火刑に処せられる⁽¹⁹⁾。

この年の末、ヘンリー六世がパリでフランス王として戴冠するが、既に民心は離れている。シャルル七世は1435年、アラスの和約でブルゴーニュ公フィリップと和睦し、翌1436年パリを奪還する。1444年、トゥールの和約でイギリスと2年間の休戦が成る。この間、彼は教会の管轄権宣言（ガリカニスム）、タイユ（地域に割り当てられた人頭税）の恒常化、「近衛部隊」や「免税射手隊」の創設など、国家体制を整備すると共に、王太子ルイと結んだ諸侯の反乱を鎮圧し、1449年、英仏の戦いが再開すると、ノルマンディーを奪回する。1453年、カスティヨンが最後の戦場となり、イギリス軍はフランス軍に降伏する。この戦いの後、いかなる条約も結ばれぬまま、百年戦争は終わり、イングランドが大陸に保有する領土はカレーのみとなった。魔女として処刑されたジャンヌ・ダルクは

1456年、名誉回復し、シャルル七世は1461年に死ぬ。彼は *le Bien Servi* (ル・ビヤン・セルヴィ 良臣王、よい家臣に恵まれた王) と渾名されたように、ジャンヌ・ダルクを始めとして、彼女の熱情に鼓舞された軍人のリシュモン・ラ・イール、サントライユ、デュノワ、資本家にして投機家のジャック・クールなどが、持てる才能を発揮して彼に仕えた。就中、アラン・シャルティエは同時代の最も名の知られた詩人だったが、流謫の王太子の側近として行動を共にし、フランス国民に檄を飛ばした。

「おお勇気と気質が女性的で、武勇からは程遠い人々よ、良識の道を踏み外すがいい。面白可笑しく暮らすために名誉もなく死ぬことを選ぶ人々よ、あなが方の父たちの堅忍不拔の精神を失うがよい。目の前だけを眺めて、あなた方の共通の敵の破滅を待つだけとは何という心の愚かさや弱さがあなた方を捕らえ、腕組みしたまま意思を屠られるに任せていることか。生家や隠居所の棟がどっちに倒れるか待っているかのように無為に時を送るがよい。それはあなた方を残らず破滅させ、その崩落の下にあなた方の破滅を閉じ込めることもあり得るだろう。」⁽²⁰⁾

シャルル七世は「ヨーロッパ最大の君主の一人」⁽²¹⁾として死に、ついで息子ルイ十一世の時代、ブルゴーニュ家の当主シャルル・ル・テメレール (*le Téméraire* 無謀公) がスイスとの戦いで、ナンシーに敗死すると、ブルゴーニュ公家は途絶え、その所領は「フランスの美しい一州」⁽²²⁾となる。直系のヴァロワ朝は次のシャルル八世で途絶え、ヴァロワ・オルレアン朝のルイ十二世一代を経て、ヴァロワ・アングレーム朝のフランソワ一世以後フランスは宗教戦争により、再び血塗れの時代に突入するのである。

一方イングランドでは敗戦の屈辱と混乱の中で、ランカスター家 (赤薔薇の紋章) とヨーク家 (白薔薇の紋章) の間に、多くの貴族を巻き込んだ薔薇戦争が始まる。最も有力な貴族で、キングズメーカーと呼ばれたウオーリック伯リチャードは最初、ヨーク家側を支持して、1461年、エドワード四世を擁立し、ヘンリー六世をロンドン塔に幽閉した。しかし彼は1471年、ランカスター家支持に回り、ヘンリーの王位を回復させる。エドワード四世はブルゴーニュ公シャルル無謀公の援軍を得て、王位を奪い返す。こうしてエドワード四世は二度、王位に着き (それはヘンリー六世にしても同じであるが)、ヨーク朝を起こす。1483年、王が死ぬと、息子のエドワード五世が十三歳で即位するが、叔父のリチャード (エドワード四世の弟) が王位を奪い、リチャード三世として即位する。エドワード五世は恐らくその年の内に弟と共に殺されてしまう。するとリチャードの強力な支持者だったバッキンガム公爵が反対派に回り、今度はランカスター家縁戚のヘンリー・テューダーを支持する。ヘンリーはフランスの摂政アンヌ (十三歳で即位したシャルル八世の姉) から軍資金を得て1485年、リチャードを倒し、ヘンリー七世として即位、テューダー朝を起こす。翌1486年、彼は殺されたエドワード五世の姉であるエリザベス・オブ・ヨー

クと結婚し、ここに紅薔薇と白薔薇の和解が成る。この戦争の中で多くの貴族が死に、勢力が弱まって、以後の諸王の専制を許す。

ヘンリー七世の後は息子のヘンリー八世が、次いでそのまた息子のエドワード六世が継ぎ、その死後、彼の異母姉、ブラッディ・メアリーと呼ばれたメアリー一世が女王の座に着くと、彼女は夫のスペイン王フェリッペ二世の対仏戦争に参加し、破れて大陸に残された唯一のイギリス領土カレーを失う。メアリーの後は異母妹エリザベスが継ぎ、ルネッサンスが開花し、「メリー・イングランド」の時代を迎える。エリザベス女王は対外的にもスペイン無敵艦隊を破り、フランス国内の新教徒とカトリックの戦いに干渉することになる。

結語

以上、百年戦争前史として、ヘンリー二世とルイ七世の関係から説き起こし、百年戦争時代の諸王の関係について概観したが、このノートの眼目は両王家の関係を俯瞰した系図の作成であり、諸王の記述は今後の研究の骨格をなすにすぎない。筆者は今年度一杯で定年を迎えるが、それ以後の、徒然にゆっくり時間を掛けて、この骨格に肉付けをして行きたい。その方法はこの時代に生きた人々が歴史の中に残していった資料に直接当たり、筆者の関心と呼ぶ個所を抽出するところにある。その人物とは、フロワッサール、コミーヌなどの年代記作者、アラン・シャルティエ、シャルル・ドルレアン、チョーサー、ガウアーなどの詩人である。勿論、先行研究は多々あるが、筆者としては、筆者なりの方法によって、この問題にアプローチしたい。なお、もう一度言わせてもらえば、冒頭の系図は、これを目にした諸賢にとって、何かの折に必ずやお役に立つことができるものであると信ずる。最後になくもがなのものであるが、註と使用文献及び、その略号を載せる。

註

- (1) N p.13. なお N のいう第二次の方を M 仏は (一) (二) に、M 英と Y 旧は前期、後期に分けている。
- (2) (3) M 仏 p. 74
- (4) M 英 p. 164 に拠る。なお N は「1152 年パリ=ボルドー間の街道のゆきずりに十九歳で三十歳の寡婦エレオノール[アリエノールの別名]と結婚する決意を固めた」と記す (p. 17)。但し M 英はアリエノールを二十七歳としている (p.164)。
- (5) M 英 p. 202 の記述。
- (6) この人物はアルビ十字軍で勲功のあったシモン・ド・モンフォールの息子である。ヘンリー三世

を苦しめたが、最後に敗れ、戦死する。

- (7) M 仏 p. 92
- (8) Hutin : 「騒ぎ, 喧嘩」を表す中世フランス語 hustin から来た語だが, 今日, この語の用法はこの王の渾名の名称としてしか残っていない。Y 新では「強情王」と訳され, パ暦では「喧嘩王」となっている。
- (9) ゲントは英語読み Ghent, フランドル語ではヘント Gent, フランス語読みではガン Gand である。
- (10) Sluis:B, Y 新, 旧は「スロイス」, M英には「レクリューズ」, 「オランダのライン川河口にあり, 英語ではスロイス」の註あり。M 仏ではエクリューズ, 「オランダ語ではズルイス」の註あり。N はこの海戦について触れず。
- (11) P 歴 p. 52
- (12) シャルル・デヴルーはここで歴史の表舞台から消えたが, その後, シャルル三世, ブランシュ世, エレオノール, ガストン, カトリーヌ, アンリ二世, ジャンヌ三世の七代を経て, ナヴァール家当主アンリが大の字つくフランス国王アンリ四世 (1589 1610) となり, ここにナヴァール王国とフランスが統一される。(各代の王, 女王の名は G 所載の系図による。vol. 10 p. 7301)
- (13) リチャードの死の記述は N による (p. 34)
- (14) ブルゴーニュ派を支持するシモン・ガボッシュ派によって強要された勅令。カボッシュ党は 1414 年, アルマニャック派によって壊滅する (RNP: Cabochiens の項目に拠る)。この勅令は公布の 4 ヶ月後には廃止された。
- (15) Encore est vive la souris (Collection littéraire Lagarde et Michard, Moyen Age p. 208) より翻訳
- (16) M 仏 p. 125
- (17) この死を B は「あらゆる人々から見放されたまま」と書き (p. 48), M 仏は「人民は・・・哀れな狂える王のために泣いた」と書く (p. 126)。
- (18) この行り M 仏 p. 126 などによる。
- (19) ジャンヌ・ダルクの記述は主として Y 旧のそれに拠った。
- (20) アラン・シャルティエ「四人讒罵問答」。この部分を引用した原本が今手許になく, かつてコピーしておいた原文を下に引用しておく。

LE RÉQUISITOIRE DE LA FRANCE

O hommes, forvoyez du chemin de bonne congnoissance, femenins de couraiges et de meurs, loingtains de vertus, forlignez [dégénéré] de la constance de vos peres, qui pour delicieusement vivre choisissez à mourir sans honneur!

Quelle musardie [folie] ou chetiveté de cueur vous tient les mains ployees et les vouleitez amaties [abattues], que vous bastez [attendez] en regardant devant vos yeulx votre commune desertion [dévastation]: et musez aussi comme attendans de quel part versera le faix [faîte] de cestuy vostre naturel herberge [logis] et retrait, lequel vous pourroit tous accraventer [écraser], et enclorre vostre ruine soubz la sienne! (A.Chartier: Le Quadriloque invectif)

なお文中, 不適切なる言辞あるも中世のこととて御容赦あらんことを。

(21) M 仏 p.134

(22) id.p. 138 の表現

使用文献及び略号

B : アンドレ・J.ブールド (高山一彦他訳)『英国史』(白水社 1994 年)

C : 『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』(1997 年)

百年戦争時代及びその前後の諸王・諸公

- G : Grand Dictionnaire Encyclopédique (Larousse, 1985)
M 英 : アンドレ・モロワ (水野茂夫他訳) 『英国史』 上巻 (白水社昭和 18 年)
M 仏 : アンドレ・モロワ (平岡昇他訳) 『フランス史』 上巻 (新潮社昭和 42 年)
N : ポール・ニコル (高山一彦訳) 『英国史』 (白水社昭和 31 年)
P 歴 : 『パリとパリジアン歴史』 (河盛好蔵訳) (角川書店 1962)
RNP: LE PETIT ROBERT DES NOMS PROPRES (1997)
Y 旧 : 井上幸治編 『フランス史』 (新版) (世界各国史 2) (山川出版社昭和 50 年)
Y 新 : 柴田三千雄他編 『フランス史 1』 (世界歴史大系) (山川出版社 1995 年)

百年戦争時代 (1339 - 1453) 及びその前後の諸王・諸公

